

## 飼育記録

1988年

1. 前年末から年頭にかけて、第4水槽室の407-411号水槽の熱帯性魚類に、細菌性と思われる奇病が発生。薬浴・換水等の対策を施したが効果はなく、この5槽の魚類は殆ど死亡したが、1月中旬には収まり、予備水槽より魚類を補充して、下旬から展示を再開した。

2. 第1水槽室創設以来16年間稼働していた新鮮海水揚水ポンプ2号機(エバラFRP製15kw)及び101号水槽循環ポンプ1・2号機(同11kw)は著しく老朽したので、6月から12月にかけて下記の機種に変更した。

揚水ポンプ：エバラSN型ナイロンコーティングポンプ5.5kw

循環ポンプ：同型7.5kw×2

揚水ポンプを小型化したのは、新鮮海水の需要(開放式水槽の総量)が以前より減ったためである。

1989年

1. 418号水槽のカクレクマノミが1月23日より3月14日まで5回にわたって産卵。ふ化した仔魚の一部は育成に成功した。

2. 5月1日に入手したウミテング(全長6cm)は、307号水槽に収容したところ槽底に自然繁殖していたヨコエビ類などの小型甲殻類をよく食べ、8月16日まで108日間生存した。本種はこれまでデトリタス食性といわれていたが、その捕食行動(口をすばやく伸縮させて餌を吸引する)からは、微少な底生動

物を主食とする肉食性と考えるべきである。

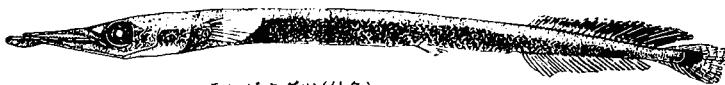
3. 229号水槽の造波装置用V字型フロートを7月26日に更新。新フロートはV字型の角度を浅くし、造波効率を良くした。

4. 7月31日に入手したテンジクダツの幼魚(全長14cm)は、TR-4号予備水槽で餌付きし(餌は水族館前スワンプで繁殖したカダヤシの幼魚)、2カ月間で全長26cmに成長したが、生き餌の補給が続かず、また水槽の広さが不十分でもあって、9月末に死亡した。

5. 8月7日、北浜船揚場前水深約2mの岩礁で、ヒゲダイの幼魚(全長12・14cm)2尾を採集。本種の成魚は水深数10mの沖合にすむが、幼魚期には岸近くの浅い所にいることが分った。この幼魚は全長が黒褐色で、ダイバーが近づいても全く逃げようとせず、体をゆっくりとローリングさせる行動から、海草片に似せた擬態をしているものと考えられる。この2尾はその後TR-0号予備水槽で餌付し、順調に生育中である。

6. 当館の魚類の展示はこれまで、入館者の観覧意欲を高めたという配慮のあまり、展示テーマが多岐に亘り、一貫性がなかった。そこで、無脊椎動物の展示と同様に、分類群ごとに配列する方法が飼育担当技官より提案され、その試行として11月末より年末にかけて、221-225号・301-309号各水槽の内容を変更した。

(荒賀忠一・田名瀬英朋)



テンジクダツ(幼魚)  
*Tylosurus acus melanotus* (Bleeker)